

みんなの
駅広会議

提言書

2006年1月

みんなの駅広会議実行委員会

みんなの駅広会議

提言書

もくじ

01 提言するにあたって	2
02 みんなの駅広会議 概要	
提言の経緯	4
みんなの駅広会議パネル展	5
みんなの駅広会議トークライブ	6
みんなの駅広会議ブログ	7
03 「みんなの駅広会議」 提言文	
提言1 素朴だけど高知らしい駅前広場をつくる	8
提言2 「街」全体との調和を考える	11
提言3 市民の声を反映させて行くために	13

01

提言するにあたって

市民の声を新しい高知駅前広場整備に反映させていただきたくて、

私たちは行動しました。

高知駅は、市民にとって大切な場所なのです。

どこかの街へすがすがしく旅にでるにも、毎日の通勤や通学をより楽しいものにするためにも、そして何より、高知を訪ねてくれる観光客の方たちに気持ちよく高知での第一歩を踏み出してもらうためにも、高知駅はとても大切な場所です。

この秋になって、いよいよ新しい高知駅の全体像が具体的に見え始めてきました。高知に暮らす私たちにとっては、どのような駅になるのかワクワクするところです。

「めっちゃ都会的な駅がえい！」

「他のまちにないような駅広を！」

「交通結節機能の充実を！」

それにしても、市民は「わがまま」です。

いろいろな「夢」を異口同音に市民のみんなが語っています。

いや、語っていなくても、きっと 32 万の市民ひとりひとりが色々な思いを抱いているはずです。

・・・行政の方にとっては、正直大変なところかも知れません。

でも、これらは高知駅や電車を利用する利用者、そして市民の“思い”なのであり、大切な新しい駅を整備するにあたって決して無視できないパーツではないかと考えます。むろん、これらの意見全てを取り込む必要はないでしょう。明確かつ明瞭な基軸に基づいて取捨選択をすることが必要であると思います。そして、これらの「パズル」にも似たたくさんパーツを組み

立てあげた時、みんなに愛され、みんなに利用される新しい高知駅が誕生するのです。

私たちは、高知を愛する市民です。高知駅についても、決して無関心ではられません。そこで、市民の皆さん、高知を愛してくれる皆さんが「高知駅前広場」略して「駅広」をどのようになりたいと考えているのか、広く意見を募っていきたいと考えるようになりました。回り道になるのかもしれませんが、たくさんの市民の意見の積み重ね、議論の積み重ねなくして「市民に愛される」広場ができるはずがないと思うからです。そして、低迷する高知駅ならびに高知駅から発する交通機関の利用者増は図ることはできないと考えています。

この提言書は、市民の生の声です。

本提言書は、専門的な基礎調査に基づくものでも、たくさんの事例に詳しい大学の先生やコンサルタントの意見でもありません。あくまで、高知駅やその周辺整備事業に“熱い思い”を持つ、市民の生の声そのものです。

本提言書にあげた事柄全てを設計に反映させていただきたいわけではありません。提言書の内容について前向きな検討を行っていただいた上で、実施設計に反映できる点とできない点、市民が取り組むべき点などを明確にし、次のステップで市民と行政の対話へとつなげていくことができればと思います。

ぜひとも本提言書に対し、前向きな回答をお寄せ下さい。

2006年1月30日

「みんなの駅広会議」実行委員会

委員長 土居貴之 (NPO 高知市民会議公共交通部会)
内田洋子 (NPO 高知市民会議事務局長)
大西みちる (NPO こうちコミュニティシネマ理事)
窪内須美 (NPO 高知市民会議公共交通部会)
小松 誠 (NPO 高知市民会議公共交通部会)
小松義徳 (NPO 高知市民会議公共交通部会)
竹村直也 (ART NPO TACO 理事、高知遺産編者)
濱田容輔 (高知まちむら創報室室長)
森恒一郎 (こじゃんと土佐を元気にする会代表)

02

みんなの駅広会議 概要

提言の経緯

昨年 11 月 27 日に開催された「JR 高知駅前広場シンポジウム」は、これまでの検討の経過や県市一体で進める高知駅周辺のまちづくりについて皆さんに関心をもっていただくとともに、これらに対する意見をいただき、今後の駅前広場の設計に反映するために行なうということでした。

今回「駅広会議」を主催した委員も、それぞれ意見や考えを用意して参加しました。しかし、いざ参加してみると、「時間切れ」という不穏当な理由で市民の意見を聞く場面もなにもなく、設計に反映するにも一体何を反映するおつもりなのか、全くもってよく分からないという結果に終わりました。

この会議に出席して、高知の街の顔であるはずの駅前広場が、「誰も何も言う間もなく」「誰も知らないうちに」、行政と都会の設計業者によって決められて行くことに、私たちは強い疑問を感じました。むろん、シンポジウムのパネリストのご都合など色々な事情があって「時間切れ」になったのかも知れませんが、コミュニティ会議など全国的にみても「開かれた市政」を行なってきた高知市らしくもない・・・、そのように感じました。

そこで、この会議に出席したメンバーを中心に、あくまで市民の立場で高知駅前広場に関する意見を集めることを思い立ち、「みんなの駅広会議」と銘打ったパネル展示とトークライブを 1 月 12 日より 15 日の 4 日間にわたり帯屋町の「ギャラリーファウスト」で実施しました。

「みんなの駅広会議」イベント概要

開催日時：2006 年 1 月 12 日（木）～1 月 15 日（日）

主催団体：みんなの駅広実行委員会・特定非営利活動法人 NPO 高知市民会議

後援団体：高知新聞社、朝日新聞社、毎日新聞社、NHK 高知放送、RKC 高知放送、KUTV テレビ高知、

KSS さんさんテレビ、エフエム高知、高知シティエフエム

みんなの駅広会議パネル展（1月12日～15日）

高知市がホームページなどで提示している資料をもとに、現在の基本設計案について解説するパネルと、情報提供不足もあって市民から誤解を招いている高知駅周辺の街路整備に伴う北口アクセスの改良などについて解説したパネルを制作・展示しました。

また、高知のまちづくりに思い入れのある人や雑誌編集部、建築家のタマゴなど6人の市民に、イメージする「新しい高知駅像」を作成してもらい、展示しました。

会場では、来訪者の皆さんに「感じたこと」「共感すること」「反感を持ったこと」など、ありとあらゆる感想をメモに書いてもらい、展示しました（→資料編参照）。

来場者数は正式なカウントをしていませんが、約160名程度と予想を若干上回る数字を残しました。



「新しい高知駅像」パネル展示者

前田矩仁子（建築家のタマゴ）、大西映（現代企業社社長）、竹村直也（ART NPO TACO）、土居貴之（NPO 高知市民会議 公共交通部会）、ペロシティ編集部

みんなの駅広会議トークライブ（1月15日14時～17時20分）

高知駅に対して特にあつい思いを持ち、様々な分野に関わっている市民をパネラーとして、会場と一緒に新しい高知駅像を探る「トークライブ」を開催しました。

事前告知はわずかなものであったにもかかわらず、参加者は予想を大幅に上回る60名（関係者を除く）を数え、会場に入れずに去った方なども多数おられるなど、市民の関心の高さを裏付ける結果となりました。

ここでは、高知市担当課からの丁寧な計画に関する解説やパネル展やブログなどから寄せられた意見を題材にしながら、いくつかのテーマごとに議論を深めました。

また、こうした場では異例ともいえるほどに会場からの意見表明が多く、パネリストの方が喋る時間が短くなるという「うれしい」誤算もありました。



「トークライブ」パネリスト

【司会】森恒一郎、内田洋子

【ゲスト】土居貴之（みんなの駅広会議実行委員長）、小松義徳（路面電車とこうちのまちを愛する会）、東崎史剛（大橋通商店街振興組合理事：中心商店街代表）、前田矩仁子（石井設計：イメージイラスト書いた人代表）、宮地北斗（高知工科大学学生：学生代表）

みんなの駅広会議ブログ (http://ekihirokochi.seesaa.net/)

活動の紹介や意見交換などを WEB 上で行えるように新たにブログを開設し、1 月上旬より運用しています。

提言書やこれに対する市の回答なども順次掲載していく予定です。

高知の隣の玄関 高知駅前広場。いま、高知駅高架化事業に伴うこの広場の再整備について、県市による検討が本格的に進んでいます。しかし、「本格的」にもかかわらずそこには市民の声が反映されていません。そんな意見が私たちの周囲では起きているのです。これではおもしろくない。そこで、私たちは勝手運的ながら、県市が検討している整備案を下敷きに、高知駅前広場のあり方を考えてみようと思いついたのです。

2006年01月24日

実行委員会よりお知らせです

記事としては久しぶりの書き込みになります。

1月16日のトークライブと、そしてその後の皆さんの熱い書き込みと、思いを同じくする方がたくさんいることばたいへん心強く思っています。

さて、ただいま実行委員会の方では、皆さんからいただきましたご意見を提言書として

2006年01月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

カテゴリ

- みんなの駅広会議(2)
- みんなの駅広会議【概要】(5)
- 市民の立場から、ご提案(3)
- 高知駅前広場【現行計画の概要】(3)

03

「みんなの駅広会議」提言文

提言1 素朴だけど高知らしい駅前広場をつくる

1. 高知の気候風土を感じる広場にする
2. ゆとりのある、目的のある広場にする
3. 乗り換えのしやすい広場にする

提言の理由

市の基本計画案では高知らしい駅前広場をつくるといった旨の言葉がありますが、「みんなの駅広会議」で市民から寄せられた意見は、おおむね高知らしさを感じないという辛辣なものでした。その意見を要約すると、現在の基本設計は市民の不評をかこっている「かるぼーと」と同じで、コンクリートや舗装材ばかりが目立つ「都会的」すぎるといったことであり、たとえばもっと緑や木の香りがあってもよいのではないかとしたことや、高知の太陽光の強さや雨の多さを考えた広場であるべきではないかとしたことでした。

これに対し、あくまでこれは基本設計であって、工事費算出やイメージ把握のためのものであるという説明も市の方よりお伺いしました。しかし、そういった位置づけのものであるのであれば、なおさら今後の実施設計の段階では、市長も含め行政各位、市民の多くが一致して「これは高知らしい！」と誇れるような設計に取り組んでいただきたいと思います。

たとえば、駅に降り立ってすぐ目の前に自家用車と電車、タクシーが雑多に並ぶ今の駅は、確かにぱっと見の利便性こそ優れていますが、「高知らしさ」を感じるよりも先にまず次の目的地へと急がせる慌ただしさを感じさせます。市民の声は、こうした慌ただしさばかりが強調される駅ではなく、列車待ちの時間をゆっくりとつぶせる駅、県外のお客様がこの駅に降り立った時に「ああ高知へやってきたんだな」と感じられる駅をつくってほしいということでした。

そして、そのためには今の駅や機能重視のきらいがある現在の基本設計よりももう一步踏み込んで、駅にやってくる「目的」をつくり出す広場や駅である必要があるという意見が多くみられました。

また、そもそも駅の主体である JR 四国の利用者数を増加させるためには、広場や駅周辺の魅力づくりはもちろん、列車の本数増加（特に夜間帯）や運賃見直しなど、根本的な対策が必要ではないかとの意見もあります。このことについては、今回の会議の趣旨からは外れる部分ですので深い議論はしませんでした。たとえば新駅開業後の試験的な増発などを JR 四国さんに実施していただくよう要望するののひとつの案といえるのではないのでしょうか。

具体的なプラン

1. 高知の気候風土を感じる広場にする

高知駅は「自然」を求めて高知にやって来る県外客の陸の玄関です。太陽光の強さや木々の多さ、空の青さや高さなど、高知の気候風土を感じることでできる広場であることが必要だという意見が、「みんなの駅広会議」に寄せられた意見では主流を占めました。

「気候風土を感じる広場」に関する具体的な意見

- ★ 杉ヒノキなど、県産材を活用した陰の美しい屋根やファニチャーのある広場
- ★ 椰子などの南国らしい樹木やセンダン、クスノキ、カシなどの高知らしい樹木、そして各市町村から供出してもらった樹木が植えられた広場（季節の移り変わりを楽しむことができる）
- ★ 都会らしさや豪華さではなく、素朴さのある広場
- ★ 駅舎と設計者が同じ牧野植物園のサテライトとなるような広場
- ★ 木造の駅舎のデザインを活かした広場（建築とランドスケープの調和／金沢駅・新潟駅）

2. ゆとりのある、目的のある広場にする

新しい広場には、「ゆとり」を求める声が多くありました。これは、現在の高知駅があまりにも機能だけに満たされた広場であることも大きいでしょうし、現在の基本設計案があまりにも機能追求に終始していることへの反発もあると思います。

また、新しい広場や周辺街区の考え方については、単に JR 四国の利用を促すための場所ではなく、駅に行く目的づくりや駅で足を止めさせる仕掛けが必要との意見が多く、ソフト面の充実が図れるような設計であることが求められています。すなわち、「それじゃあ、ここでご飯食べていく？」となるような仕掛けです。

「ゆとりのある広場」に関する具体的な意見

- ★ ただの通路ではなく、ゆっくりと楽しみながら歩ける広がりのある広場
- ★ 若者にとって楽しく、高齢者や障害を持つ人にとっては使いやすい広場
- ★ 地産地消を地でゆく街路市（土曜市を移転）やオープンカフェ、フリーマーケット、よさこい演舞場、ダンスやライブ会場などとしても利用できる広場（歩行空間と共用）
- ★ こどもも遊べる空間のある広場

- ★ 三翠園温泉などから引き湯した「足湯」のある広場
- ★ わかりやすい観光インフォメーションセンターのある広場
- ★ きれいで使いやすいトイレのある広場
- ★ 徹底してわかりやすいサインの整備
- ★ 広場の維持管理費が不安なのであれば、花壇や芝生はボランティアグループや市民グループなどで管理するなど、ランニングコストの低減を図ることを考えてはどうか

「周辺街区」や「駅商業施設」に関する具体的な意見

- ★ ひろめ市場のような、集客力のあるテナントをおく
- ★ 待ち時間をゆったりとつぶすことのできるテイクアウト形式併用のカフェや本屋、旅行者の調べものに便利なインターネットカフェを設置する
- ★ 終電を遅くして、思い出横丁のような飲み屋街を設ける

3.乗り換えのしやすい広場にする

新しい広場は、公共交通の乗り換え拠点ともなります。現在の基本設計案は「どこから入るか、出るか」、「何台納めるか」の技術的問題や縄張りの問題に終始している感があり、そのことが市民から「ゆとりがない」、「機能ばかりで面白みがない」といった批評につながっているのだと思います。

市民が求めているのはこうしたハード云々よりも、実際に乗り換えのしやすいダイヤや便数となるのか。鉄道とバス、路面電車などで乗り換えをする際に、歩行者動線と自動車動線が交錯せず、安全に分かりやすく乗り換えができるかどうかということであると考えます。

南口と北口に計9台分のバス乗降場が計画されていますが、はりまや橋周辺の将来計画と合わせ、行政と市民、そして交通事業者が共に活かし方を考えていくべきであると思います。

また、出迎えや買い物などで駅周辺に自家用車で行く人のための駐車台数がどれくらい確保されるのかといった点も重要です。周辺の拠点街区との兼ね合いがあるとはいえ、基本設計案では、駐車台数が不足する懸念が拭えません。また、南口への一般車の進入を確実に阻止できない限り、他の公共交通機関の定時運行に支障をきたすおそれがあります。

「乗り換えのしやすい広場」に関する具体的な意見

- ★ パークアンドライドの推進
- ★ 月単位での利用も可能なレンタサイクルの整備
- ★ 駅に乗り入れる交通機関による利便性の高い運行（充実したダイヤ、運行時間の延長など）
- ★ 安い駐車場や駐輪場の充実
- ★ なによりも、交通事業者間の調整

「街」全体との調和を考える

1. 中心市街地など街の各地域とのつながりをつくる
2. 公共交通の満足度アップをはかる
3. 拠点街区との密なる連携

提言の理由

新しい高知駅とその駅前広場の計画にあたっては、「街」全体との調和を図ることが欠かせません。これからの高知の「街」全体の整備の方向性、すなわちランドデザインといかにして整合性を図って行くか、そのことが重要と考えます。

これまで、高知女子大池キャンパスや高知医療センター、高知工科大学、県立美術館等、都市のドーナツ化を促進するような形で郊外地域への重要施設の整備が県市により進められてきました。また、昨年秋には橋本県知事より駅前の県有地に女子大と図書館、県民文化ホールを移転してはどうかという提案があったのも記憶に新しいところです。

これらに対し、今回の「駅広会議」では市民から「行政は公共交通重視の都市づくりをしたいのかどうなのか、わからない」との声が多くあがりました。その他にも、施設をまるでチェスのように動かすだけの場所取りゲームをするのではなく、何か問題があると「民間で考えていただくこと」と逃げるのではなく、「高知の街をこのような街にするために、このような政策を打つ」という考えを聞きたいとの声があがりました。

確かに、新しい高知駅に人を集めたいのであれば、市内に点在する公共的施設（例えば県庁や市役所、女子大、図書館など）を駅周辺拠点街区に移転させるのが手っ取り早い手法であることは間違いありません。しかし、その結果として取り残された跡地にどこにでもあるようなマンションが立ち並んだり、ただの駐車場ができるというだけでは、なんにもならないと思うのです。

わたしたち市民は、高知駅ができあがった時に高知の街のどこかが魅力を失うような政策を手放しで喜ぶことができません。「高知駅が完成したことで、高知のまち自体の魅力も向上したにゃあ」と市民県民が満足できるような施設整備を求めているのです。

もちろん、これから街が進むべき方向性は様々なものがあると思います。コンパクトシティを目指すのかそうでないのか、公共交通を重視するのかそうでないのか。駅と街なかをどのようにして結んでいくのか・・・行政と市民は、その取捨選択の中で、駅前広場の持つ役割、駅周辺拠点街区のになうべき役割をじっくりと考えて行く必要があると思うのです。

今回の「駅広会議」でも、市民からたくさんの意見が出てきました。商店街や市北部のイオン SC などとの関係をいかにしていくのか、「残したいけど乗っていない」公共交通をいかにして使えるものに育てていくのかなど、今後の行政政策を考える上でもヒントになることが隠されているのではないかと、思います。

具体的なプラン

1. 中心市街地など街の各地域とのつながりをつくる

新しい高知駅とその周辺の拠点街区は、商業施設が立地すれば、イオン高知出店以来の大規模な商業地図塗り替えに繋がる可能性があります。こうしたとき、駅と街全体のつながり、そして役割分担をどう考えるかということは、きわめて重要な課題になるといえます。

また、これからの高齢化社会も加味して考えると、駅と商店街、駅と住宅地といった両者をつなぐ公共交通網の充実も大きな課題となるでしょう。

「街」と「駅」に関する具体的な意見

- ★ 駅から街へと伸びる電車通り沿いを歩いて楽しい空間に
- ★ 路面電車を活用して、はりまや橋と高知駅前間をピストン輸送する
- ★ パークアンドライドを推進し、高知駅から路面電車やバスに乗り換えて商店街やその他の地域に行けるようにする。また、レンタサイクルのステーションで自転車への乗換えも容易に
- ★ 県民文化ホールなど、今ある財産を活かすことを考えてほしい（スクラップアンドビルド反対!）

2. 公共交通の満足度アップをはかる

高知駅に乗り入れる鉄道（JR）、高速バス（バス事業者各社）、路線バス（バス事業者各社）、路面電車（土佐電鉄）等の公共交通システムとタクシーが、それぞれの長所短所を連携させながら市民の移動ニーズに応じていくためには、その起終点となる高知駅において利用者の満足度を第一に考えたハード・ソフト両面による整備が求められます。

「公共交通の満足度」に関する具体的な意見

- ★ JR、とでん、県交通、タクシー事業者が連携をし、ダイヤや割引プログラムなどを調整
- ★ 方面別の分かりやすい路線バス乗り場の配置
- ★ わかりやすいサイン計画の実施とバス／電車の時刻案内
- ★ 県有地もしくは駅広東側に隣接するJR敷地を一部活用した交通結節機能の整備
- ★ 利用者の多い高速バス乗降場の配置を明確化
- ★ 高知県中心部における交通システムの在り方を定めた計画の策定

3. 拠点街区との密なる連携が必要

周囲の拠点街区がどうなるのかわからないのに駅前広場の動線計画はできません。名前などを募集するよりも先に、駅を核とするひとつのまちをつくるものと考え、駅周辺拠点街区を所有する4者は早い段階で開発の構想を提示するべきではないかと考えます。

そのうえで、市民・県民を加えた5者による意見交換会を行なうべきと考えます。

提言3 市民の声を反映させていくために

1. まちづくりの主体が対話できる仕組みをつくる
2. 十分な情報発信と関心を高める工夫をする
3. 提案の反映と回答のおねがい

提言の理由 市民と市民、市民と行政が対話できる仕組みが必要だ！

高知市は、全国的にも先進的な「コミュニティ計画推進事業」を実施してきました。これはおおむね小学校区で地域の課題を住民が考え、高知市の計画とするものです。

このような手法は他自治体のお手本となり、同様な手法を導入して住民が自治に関わるきっかけとなった自治体も増えています。私たちは、このような手法をさらに広げ、高知市の課題に対して住民が意見や考えを醸成させる機会を増やしていく必要性を感じています。

しかし、残念ながら今回の高知駅前広場の検討過程においては、市民のそういった思いを実りあるものにするための対話の場や情報発信は皆無に近く、市民の側からすると市民不在のまま事を収めようとしているのではないかという不安が芽生えてきました。

『みんなの駅広会議』は、これらの不満や危機感に背中を押され、行き場に困っていた市民の声を高知市に届けることを目的に開催したもので、その結果様々な意見や考えが市民から出され、行政も市民も事業者もが一体となつての議論がかわされました。わずか数時間の出来事ではありましたが、このような経験の積み重ねが「住民」を「市民」に育てていくものと思いますし、「市民」をただただサービスを受ける立場としてだけではなく、自治の一部の担い手として育てあげていくよいことにつながるのだと思います。

駅前広場や拠点街区のみならず、高知の都市計画やまちづくり全体に市民の意見を反映させていくための仕組みづくりを、市民と共に進めていくことを切に願います。

具体的なプラン

1. まちづくりの主体が対話できる仕組みをつくる

私たちが必要としているのは、限られたメンバーで話し合われて生み出された生活空間ではなく、まちづくりの様々な主体が、それぞれの思いを出し合い、積み重ね、発展させていく中で生まれる生活空間です。

駅前広場のことについて話し合っていたときもそうでしたが、たとえば行政と市民が同じ日本語で話し合っているときも、言葉のイメージや内容が大きく異なっているときがあります。言葉のイメージや内容、意味を突き詰めて話し合うことは情報共有の基本ですが、それをするためには、双方向かつ同じ次元で語り合うしかないのです。一方通行のアンケートで住民の考えや意見を的確につかむことができないのはこのためでしょう。

また、同じように、海外の事例を引っ張りだして高知の駅前を語ろうとしてもさっぱりイ

メージがわきません。ここで必要なのは、海外の事例を高知にあてはめるための話をするのではなく、海外の事例を高知ならいかに料理をするのか、そのことを話し合うことが必要ということなのです。知識はもちろん重要ですが、そのことを互いに分かり合うことのできる言葉、互いにその価値を分かり合える言葉にしていく作業が大切だと思うのです。

このことは、行政だけに求めるのではなく、市民の側にも求められることだと思います。トークライブでは、市民の意見を聞くために出席していただいた市職員の方への質問や注文が多く寄せられる場面がありました。ただ「～してくれ」という要望に終始したり、無責任な発言や言いつばなしで終わらせるのではなく、どのように利用したいかという「生活提案」と、それをどのように実現していくのかという「計画提案」、そして自身や市民は一体どういった協力ができるのか、その仕掛けを共に考えていくことができるようにしていくことが大切だと痛感しました。

これからは、お互いをもっと話し合い学び合うことが必要なのであり、計画の初期段階からまちづくりの主体たる住民が継続して参加でき、深い内容まで行政と対話することのできる場と仕組みを設けていくことが必要だと考えます。

「対話ができる仕組み」に関する具体的な意見

- ★ 計画のプロセスや検討委員の選定についても、公募、公開で行うべき
- ★ 行政と市民がきちんと議論（要望型市民と言いつ型行政からの脱却）することも必要
- ★ 政策決定のプロセスへ市民参加を
- ★ 利害の関係する団体／会社が「本音」を出しあって話し合うことが必要
- ★ 計画が進んでいく各段階でこのような話し合いの場を設けてほしい

2. 十分な情報発信と関心を高める工夫をする

『みんなの駅広会議』では、アートと駅前広場を組み合わせることで「シンポジウムには行きづらいけど、ギャラリーなら行ってみようかな」といった軽さを持たせ、できるだけ多くの人に興味を持ってもらえるような仕掛けをしました。告知期間はわずかに2週間たらず、告知費用は数百円にもなりません（告知媒体は新聞、テレビの他、ポスター数十枚とブログなどでした）が、のべ200人以上のお客さんにご来場いただきました。また、お客さんの半分以上は20・30代で、女性の方が多かったのも驚きでした。

今の時代は、広報だけでなく様々な媒体を組み合わせ、関心を高める情報発信を行なう必要があります。また、関心の高い人に情報がきちんと行き渡るような仕掛けも求められていると思います。

「情報発信」に関する具体的な意見

- ★ 広く、県民及び市民のコンセンサスを得るのであれば高知新聞全ページ見開等で告知すべき
- ★ 今回のようなフランクな形で実施されたイベントであれば、入りやすい
- ★ 市民がもっと関心を持たないとダメ
- ★ 他の四国の駅との比較など、高知駅がどういう立地にあるのかわかりやすくパネルができており、こうしたわかりやすい説明が行政にも必要と感じた

3. 提案の反映と回答のお願い

『みんなの駅広会議』では、駅前広場といった限られた場所についての意見にとどまらず、中心商店街やイオンなどの郊外店舗、県内市町村との観光ネットワークなど様々な視点からたくさんの意見が出され、高知の街全体への市民の関心の高さが示されました。

私たち市民は、今回提出する提言書の「どこがどのように反映されたのか」ということにこれから大きな関心を寄せて行くことになると思います。必要なのは、その決定過程や理由説明を市民の側に対してしっかりと行っていただきたいということです。そして、そのことが、市民と行政のより良い関係を創る上で欠かせない第一歩になると考えます。

提案の今後に関する具体的な意見

- ★ みんなの意見で基本設計案がどのように修正されるのか期待している
- ★ みんなの意見を聞いて市が取り上げる。どれが選択されるのか、そのような決定の場面を設定してもらいたいと思う

以上